

〈座談会〉

# ロータリー文庫について

1987年5月

ロータリー文庫

# 座 談 会

## ロータリー文庫について

安 野 譲 次 (「友」特別顧問・「米山」副理事長)

西 村 二 郎 (文庫初代委員長)

入 江 直 祐 (文庫第3代委員長・相談役)

津 田 進 (委員長)

黒 澤 張 三 (副委員長)

葛 生 東一郎 (主 事)

昭和62年5月20日

新高輪プリンスホテル

## ロータリー文庫について

津田 きょうはお忙しいところを、またご遠路おいいただきありがとうございます。

「座談会のご案内」というこの文は主事の葛生さんが書いたんですが、なかなか要領よくまく書いてくれたと思います。文庫もちょうど17年目になりまして、昨年度、ガバナー会議のいろいろな問題があって、ちょっと危機感があったんです。それで、ここに書いてありますように、ロータリー界での文庫存立の意義とあり方というようなことについて、過去の歴史とか、現在の状態、そういうものを取り上げて、この文庫の創立に当たってくださった方々のご意見をいろいろお聞きしておきたい。そういう考えで、今年になりましてからこの計画を立てさせていただいたわけでございます。

きょうご出席いただいた方は、西村さん、初代委員長でございます。それから入江先生。青山さんがお亡くなりになっておりますので、3代目の委員長の入江先生においでいただきました。それから安野さんは「友」の特別顧問とか、あるいは「米山」の副理事長ということで、abc会館へよくおみえになり、そのときに文庫の方へもたびたびお寄りいただいておりますので、外部からみた文庫についていろいろご示唆をいただけるのではないかと思うわけで

ございます。そういうお三方にいろいろご意見をお聞かせいただいて、これからの文庫のあり方についてご教示いただければと存じます。

もう17年たちまして、そろそろ文庫創立のころのいろいろな状況がだんだんと忘れ去られていきつつある。それを記録として、当時の方々がご健在のうちに書きとめておきたいという気持ちもございまして、この企画を立てさせていただいたわけです。先週、文庫運営委員会を開きましたときに佐々木さんからご発言がありまして、当時の方として、湯浅さんも、R. I. の理事としてご協力いただいたということ、あるいは「友」の川崎覚太郎さん、こういう方々も協力いただいております。そういう方々からもまたご意見、お話を承る機会もつくりたいと考えております。きょうが第1回の催しでございますので、よろしく願いいたします。

葛生 先日の委員会で、この座談会は「友」に掲載したらどうか、という意見もありましたが、話の内容が掲載に向くかどうか分かりませんし、また掲載してもらえるかどうかも分かりませんので、この記録の利用については、今後慎重に検討させていただきたいと思っております。

文庫の意義について、大先達の皆様からお教

えをいただけることは、今後の文庫にとって非常な力となります。この記録は立派にお役に立たせていただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

お気軽にいろいろとお話をいただきたいと思えます。

記録や資料などの字面だけからでは酌み取ることの出来ないような貴重なことがあると思えます。本日はそのような生のお話をお聞かせ願いたいと思えますので、よろしく願いいたします。

安野 一言だけ、今、僕の考えと違ったことが出てきておりましたので、誤解が起こるといけませんから申し上げておきますけれども、決して「ロータリーの友」へ載せるというようなことを前提としてあのときの話はなかったと思うんです。これは余程気をつけないと後で誤解の種になりますので、それだけ申し上げておきたいと存じます。

津田 きょうのはかなりボリュームのある内容になってしまうと思えますので、「友」のスペースでは採録するのが難しいんじゃないかということがございます。それから向こうの編集方針もございますし……。

黒澤 私は昨年、前年、委員長をしておられました吉井さんから、ちょうど任期でご退任になるについて、その後、文庫の方をみろというご指示をいただきました。次は津田さんが委員長ということで、津田さんとは同期のガバナーですので、大変気を強くいたしております。

このたびは副委員長ということで出席させていただいたわけでございます。どうぞよろしくお願いいたします。

西村 もうあれから17年たちまして、私も少し頭がボケているから大分忘れていますがけれども、それでも今のうちに何か当時の記録をとっておきたいということは大変ありがたいことだと思います。あのころ一緒に仕事をした方が少なくなりまして、こっちも心細くなっているところですから、こういう催しをしていただいたのは大変ありがたいと思っています。ただ、私はあのころ委員長をやれということでやりましたので、あるいは記憶違いもあるかもしれませんが、私の関与した限りのことで、一応の発端といえますか、ロータリー文庫の始まるころの話のひとつ申し上げてみたいと思えます。

これは申すまでもないことですが、今の文庫、そのころは「ロータリー資料室」といってましたが、日本ロータリーの50年を迎えたときの記念事業ということで発足したわけです。その発端となりましたのは、五十年史をつくるに当たってかなり貴重な資料が集まって、それをそのまま散逸させてしまうのは惜しいと。これを基本にして、ロータリー関係の内、また古い、新しい、いろんな資料を集めて図書館のようなものをつくらどうかという議論が当時の連絡委員会で起こりました。それが発端なわけですが、当時の連絡委員会というもののことを申し上げておいた方がいいと思えます。

これは今のガバナー会議と違ひまして、直前ガバナーの集まりで、ガバナーは日常の公式訪問、その他の地区の仕事でお忙しいから、日本全体のことについていろいろ調整したり打ち合わせしたりする暇が無い、これは直前ガバナーがお手伝いすべきだろうということで、直前ガバナーが連絡委員、そこにまた数名の日本のロータリーのベテランの方々が常任委員ということで数名加わりました。これはただ連絡委員会を円滑に進めるためのものでしかないんですけれども、そういう常任委員というのが出来て、それで直前ガバナーが連絡委員会というものを組織したわけです。

今からいうとおかしな話ですが、あのころはまだ、日本というものを一つの単位にして動くということはR. I. に対して非常にはばかりがあったわけです。これはご承知のとおり、日満ロータリー以来のいきさつがありまして、どうも日本がまとまって動くということはR. I. の方も警戒しているし、こちらの方もそうみられては困るということで遠慮していたわけですから、連絡委員会といってもそれが正面切って一つの機関だということは出来なかったわけです。でも、そこでそういう話を出して、ちょうどこれが昭和45年、1970年になるわけですが、7月のガバナー会議、これは正式のガバナー会議ですが、それにかけて決定をしまして、そこで発足したわけです。

このころのロータリーのことについて一番中心になっておられたのは、亡くなられた柏原孫左衛

門さんですけども、連絡委員会の委員長でもあったわけです。この柏原さんから、どういうわけか知りませんが、私にこれをやれというお話がありまして、ちょっと面食らったわけです。私のことをちょっと申し上げて恐縮ですけども、私は大体新聞屋でございまして、情報関係が商売、しかも私が前にいました同盟通信社では私が調査部を預かっていて、いろんな内外の資料を扱っていたわけです。そういう点まで考えられて柏原さんがやれといわれたのかどうか知りませんが、とにかくやれといわれれば、そういう経歴もあるし、またこういうことが嫌いでもないので、じゃどんなものになるか分らんけどお引き受けしようということでお引き受けしたわけです。

そのときに私の頭にあったのは、私自身の力ではとても出来ないけれども、私が同盟の調査部にいましたころに、調査部員として資料のことをやってもらった、資料室の初代の主事の武者幸四郎君というのが、資料、図書の関係ではベテランで、一緒に仕事をすることがありますので、この武者君の力をかりてやれば出来るなあと、そういうことでお引き受けしたわけなんです。それでその年の11月から準備に着手しまして、そのころあった五十年史のときの資料というものは、非常に内容は貴重なものがあるんですけども、それほどたくさんあったというわけではないので、これから、新しいもの、また古いものをどうやって集めるかということが問題だったわけです。

もう一つは、武者君は図書資料というものの整理についてはベテランですけれども、ロータリーのことは全く知らないんです。そこでロータリーのことについては私が采配を振るわなきゃいかん。ロータリーというものはどういうものか、その構造、性格、それから資料というものはどこからどういうふうに出てくるか、今後それをどうやって整理したら、ずうっと今後長きにわたって整理が出来るかというその仕組みというものはどうしても私の方で考えなければならなかったのです。それを私なりに考えまして、こういう項目があるんだと。これを項目別に整理するようにシステムをつくってもらいたいということで、その項目に従って、図書整理の十進法といいますか、今の文庫の整理システムをつくったわけです。どういふご批判があるか分かりませんが、今のシステムは、あそこまでつくってしまうと、もう駄目だから変えろということになっても、とても変えられないと思いますので、もし具合の悪い点があれば、私のその当時のやり方が悪かったということになるわけなんです。

そのときは、ご承知のように、今の場所じゃなくて、有楽町の有楽町ビルという狭いところですけども、そこに五十年史の編纂室もありましたので、その隣の15坪ぐらいの部屋を一応部屋にしまして、武者君のほか女性1人を補助に置いてスタートしたわけです。そのシステムのもとに資料集めにかかったわけですけども、1つには、まず新しいものがどうここへ流

れてくるようにするかと。ところが、そのころ、さっき申しましたように、日本の資料室だと、日本のロータリーだということを正面に出せないわけです。これが出せれば何のことはないんですが、R. I. から資料をもらうにしても、あるいはあの当時の日本にあったR. I. の文献事務所から資料をもらうにしても、とにかく日本ロータリーということを出せないで、そのときは青山さんが委員だと思えますが、青山さんの市川東でしたか、そのクラブを表面のクラブにして、必要な資料は市川東クラブの名のもとに集める。「ロータリーの友」であるとか、地区であるとか、あるいはクラブであるとかは日本の内部のことですから話は出来ませんが、R. I. 関係などはそういうクラブというものにももらうようにして、それが資料室へ回ってくるようにしたわけです。

それから古いものは有志の方からの寄附をいただく以外にないわけで、一番基礎になったのは柏原さんの持っておられる資料。それが大分あったわけですが、この柏原さんのものをそっくりちょうだいし、それからまた、亡くなられましたけれども、仙台の手島周太郎さんが大変熱心に応援してくださって、この方からもいろいろちょうだいいたしました。それから福岡の松本兼二郎さん、また豊橋の神野太郎さん、それからまた、今も関係しておられる、佐々木硝子の佐々木さんなどから大変ご支援をいただきました。それから東ヶ崎さんからは、それこそ東ヶ崎さんでなければ持っていないような

R. I. 関係のいろんな記念品をちょうだいしてガラス棚の中に飾ってあるわけですけども、そういうものとか、その他いろいろの方からいただきました。

ただし、非常に重複するんです。皆さんが持っておられるのは大体似たようなものなので、1人の方がもしいっぱい集めているならばそれだけでも間に合うぐらいのものを、いろんな方からいただいたので、重複したものを整理するのが大変だったわけです。それで一部は米山記念館の方にお送りしたのもありますけれども、とにかくかなり重複したものを整理したりして、必要なものだけ残したわけです。

しかし、それで十分かという、矢張り抜けているものは抜けているので、まだまだすっきり完全だとはいえませんが、とにかく一通り、いろんな方をいただいて、基礎だけが出来上がった。その後は新しいものがどんどんとふえていったということだと思います。実は東京クラブあたりからもっと欲しかったんですけども、東京クラブはどうしても東京クラブに置いておくんだということで、そのものを出していただくことは、そのころは出来ませんでした。今はどうなっているか知りません。

また、初めのころは、「ロータリーの友」がまた似たような仕事をしているわけで、この両方を調整するのにちょっと苦勞がありましたし、安野さんあたりからそれは大分いろいろご心配をいただいたことだと思います。

そんなことで一応スタートを切りまして、1

年準備期間を置いて、1971年、昭和46年の11月に公開したわけです。そのころの資料の数は恐らく2,000点ぐらいしかなかったと思います。その当時はとにかくロータリーの資料を集めておくんだということで、単純に「ロータリー資料室」という名前をつけまして、組織としては連絡委員会のもとに置く。もともと単独の存在ではございませんので、連絡委員会のもとに置いて、経費も連絡委員会の歳入の中からもらってくるということで、かなり変則なやり方でスタートしたわけです。今も残っていますが、管理規定とか、管理委員会の規定とかいうものを一応つくって形だけは出来たんですけども、まだまだ内容が十分というわけにはいきません。

しかし、平沢先生あたりからも、何でもいから早く始めろと叱咤されたんで、一年で一応は店をあげたということなんであります。そのころは、室長という制度がありまして、柏原さんの黒江屋の責任者でいた日本橋クラブの堤正元さんが室長ということで関与しておられました。これは主として財政面をやっておられたわけですが、どうしてもこれは柏原さんからのものがスタートしたということで、ただ自然にそうになった、またそうならざるを得なかったということなんであります。

昭和47年、日本ロータリー五十年史の編纂委員会が解散をいたしましたので、そのときにまだ基金が余っていた。その余った2,000万円を資料室のために寄託されまして、資料室の基金としてお預かりしたわけです。その後また、五十

年史の売りさばきについて残部の販売を委託されて、それもまた資料室の収入になったはずであります。そして昭和48年6月に資料目録というものをやっつくるようになって、それは4,000点ぐらいのものがあったと思います。私は45年から48年まで3年間も委員長をさせられましたけれども、3年目の48年、1973年の7月に青山さんと委員長をかわりまして、そのときに武者君もやめて、主事に、葛生君の前任者の足立彰君がなったわけです。この足立君も矢張り同盟通信社の調査部にいた人で、私と一緒に仕事をした仲間であります。そして青山さんの考えで、ロータリー資料室というのはただ資料をとっておくというような意味が強いからというので、活用することを主にして「ロータリー文庫」と名前を変えようというご意見がありまして、そのように名前が変わって今日に至ったわけです。それからまた50年には、ここにおいでの入江さんに委員長になっていただいた。

その年から顧問制というものがつくられましたけれども、私は3年顧問をやってやめさせていただきました。毎年委員長が顧問になるとどんどんふえていく、そんなにふえる必要無いじゃないかということで、私がまずもってやめさせていただいたわけなんです。

そんなことからスタートしまして、現在は恐らく資料は1万数千点になっていると思いますし、かなり充実してきたと思いますが、スタートのときのおよその状況はそんなことだったと

私は記憶しています。入江先生なり、安野さんなり、いろいろまたご関係のことがあったと思いますんで、訂正なり補充なりしていただきたいと思えます。

津田 文庫発足からの全般にわたってお話しいただき、ありがとうございました。また項目別についてもお話しくださるようお願いいたします。

入江先生、いかがでしょうか。

入江 初代西村委員長のご苦勞のほどを今さら初めて伺いました。私のときはもう既に文庫という独立組織が決まっております、その規定、組織も決まっております、連絡委員会から離れて独立組織ということになったところでございます。これは青山さんが非常に骨を折られて、仕事のし残りがあるからおれは2年続けてやるぞといって2年続けておやりになった。おかげで随分、規約から組織から、そういうものが出来たわけでございます。そういう出来上がった規約、組織の上に私が乗っかりましたので、非常に楽でございました。

ただ、足立君は一生懸命に資料を集めてくれましたけれども、まだ有楽町ビルの暗い一室のことでもございまして、何分にも図書室となりますと図書が無ければ意味が無いと思えました。一つの文化事業的なものでございますので、もう既に文庫という名前が知れ渡っているのです、各人から資料がどんどん入ってくる。ほうっておいても入ってくるような時代になりましたけれども、いかんせん、図書に関する限り、ゼロ

に等しい。図書館というものの名前にふさわしくないわけです。私は図書を集めるということに専念したわけでございます。

おかげでいろんな書物もあちこちからいただきましたし、外国の書物も集めなければいけないと思ひまして、種々分けていただきましたし、また笹部君から遺言状として死蔵の書物を、これは珍しい書物でございますが、寄附してもらいました。それから、イギリスへ会長代理に行きましたとき、イギリス R. I. B. I. の特殊なものがございまして、この書類、報告、その他のものを出来る限り集めてまいりました。そのときでしたか、ポール・ハリス先生の「イギリス島めぐり」という図書を手に入れてまいりました。3部ございまして、2部は日本にも来ておりましたけれども、最後の1部が無い。これは私が下手な演説をいたしましたそのごほうびとしていただいでまいりました。そういうわけで、図書はある程度私は集めておきました。

ただ、このとき、部屋の転居問題が起こりました。三菱地所の堤君がやってまいりましていろいろご相談をいたしました、どこへ移すかということになりまして、湯浅さんのご希望もありましたので、「友」と相並ぶ a b c 会館へ移転することとなりました。そのとき、堤・三菱地所理事が非常に尽力してくれました。これは亡き鱸正太郎君の弟さんでございました。そういう関係で非常にスムーズに移転事務がはかどれたということでございます。

ただ、移転いたしましたところ、あそこの a b c 会館は床がよくなって、これだけの資料を持ち込まれたら床が抜けるというので、苦勞いたしました。それは非常に苦勞でございました。

安野 あれは消防署を納得させないと本が置けないんですね。それで、消防署とかけ合って……。

入江 ええ。いろんなことがございました。

安野 入江さんのお顔でもって解決しないことなんてのは無いですよ（笑い）。

入江 そんなことございませませんが、とにかく解決いたしまして、足立君が一所懸命に書類をとりそろえてくれました。足立君がいなかったら書類のとりそろえは難しかったかと思えます。非常によくやってくれました。それから女子の職員の菅原さんがまた非常に有能な方でございまして、非常に助けになったと思えます。そのころ、五十年史の出版ということがございましたが、これをとて a b c 会館には置けない、床が抜けちゃうというので、柏原先生をお願いして、柏原先生の倉庫に敷金無しでおさめていただきまして非常に楽をいたしました。あれは普通の倉庫におさめたら大変でございました。

安野 やっと全部片づきました。

入江 そういうことでございます（笑い）。

そのころでしたか、これは余談にわたりますけれど、夏の連絡会のときでしたか、安野先生に私は毒づいたことがあるんです。「友」の委員長さんですよ。「友」なんていうのは多国籍企業をやっている、資金が潤沢だから、少し貧弱な

文庫にも回していただきたいといって毒づいたことがございましたが、その反響がありまして、各地区から多大の寄付金をいただきました。あれが100万円とか30万円とか、多額の寄付をいただきまして、非常に地歩を固め得た時期がございました。悪口をいって相済みませんでした……(笑い)。そういうわけでございまして、何くれとなく、悪友じゃなくて、善友の安野さんにはいろいろお手伝いを願ったわけでございます。

安野 入江さんのいい悪口じゃなく、悪い悪口が非常に物をいうというのを発見しました(笑い)。

入江 いやいや、どういたしまして。そのころ私、五十年史の編纂の副委員長でしたかな。絹川さんが委員長で。それから文献の方で私、仕事がございまして、非常に忙しくなりました。困ったなと思いましたがときに任期が切れまして、どうにかこうにか無事に任期を終りました。それだけでございます。

津田 先生が50年ですね。51年に出来た規定があるんですが、このときに「ガバナー連絡会議の付属機関として設置されたロータリー文庫」という文が入るんです。それまで「付属機関」という言葉はなかったんですね。57年にまた元へ戻るんですが……。

入江 私のときは「付属機関」という条項はなかったです。独立機関ということでございました。

安野 脱線の上に脱線を重ねることになると

思いますけれども、私ども素人が文庫なるものをみておきますと、そのときのロータリーの動き方と必ずしも一心同体みたいな形で動いていたとは思われないようなこともあったんです。しかし、その中で1つ私が覚えておりますのは、1968年～69年のR. I. 会長に東ヶ崎君がおなりになったんです。ところが、東ヶ崎さんは富士海外の社長として非常にご活躍なんですけれども、非常に清廉潔白な方ですから、財政的な裏づけがなかったということ。これを何とかしなきゃいけないんじゃないかと。これはちょっと話が前後いたしますけれども、1964年～65年のガバナーのグループが——それまで日本のガバナーグループというのは非常にまとまりの無い、かなり自由奔放に動いておいでになったんですけど、それにガバナー会といった形でもって一つの網をかぶせたということになるんです。

これは笹部さんみたいな非常に明晰な頭脳を持ってらっしゃる方が我々の仲間でしたから、笹部さんに随分ご相談も申し上げたことはあるんですけども、それで結局、有楽町のビルの中の一部屋、今、入江さんから詳しい話を伺いましたけれども、そんな高尚なことじゃなくて、日常茶飯事でもまとまったことをやるということとはなかなか難しかったんでございまして、東ヶ崎さんが会長でおありになる間に、日本のロータリーの先駆者であるガバナーたち、パストガバナーの方々がもう少し一つになってやらなきゃ外からみてもみともないんじゃない

いかということで、有楽町ビルから今の芝公園のa b c会館に移ったんでございます。

その移ったときの状況は、今お話があったように、消防署からクレームをつけられたりなんかしてかなり難渋したんですけども、大変ご立派な方々がおいでになりましていいお仕事をさせていただいたんで、現在のような姿にまでなっちゃったんでございます。しかし、これは決して非常にスムーズに事が運んだというわけではないんでございます。ただ、この特徴として、どなたも悪意でもって仕事をおやりになるということではなくて、みんな善意でもってご心配くださった。私は「ロータリーの友」でもって変な駆け足をやったために大分入江さんなんかからは手ひどいご批判は受けましたけれども、何となく今でも英文「ロータリーの友」なるものは動いておりますんで、その辺で私のめくらの動き方に対しての勘気をやわらげていただきたいと思うんでございます。

僕はしょっちゅう「ライブラリー」という言葉を使ってしまふんですけども、このごろは本当に立派なものだと私は思います。また本のほかにフィルムを多分に持っております、どうやら、よそからみてみずぼらしいというような印象はもう皆様方お受けにならないんじゃないかなと思っております。これから先どういうようになりますか、去年のように、突発的に嵐が吹いたりということが、今まで余りロータリーでなかったことが起こるんでございますけれども、そんなときにでも、図書室というもの

は非常に冷静にきちんと行く道を動いているということは立派なものだなと、私感じているんでございます。これからどういようになるかわりませんが、今までの皆様方のご努力というのは大変なものだったと私はみております。

そんなことで「友」とか「米山」とかというのはまた全然違う性質を持っておりまして、また性質の違う仕事をやりますので、これがいろんなプラスになるだけじゃなくて、またマイナスの面も出てくるということになりますと、非常にいろんなことが起こると思うんでございすけれども、今のところ、そういったことは余りご心配にならなくてもいいんじゃないかなと私はみておりますので、どうぞひとつよろしくお願い申し上げます。

津田 安野さんは文庫をご利用いただいているお客さんのナンバーワンではないかと思うのですが、PR不足だとか、利用しにくいんじゃないかという、委員会内部での自己反省があるんですけども、その点について利用者としてまたお話をいただければと思います。しかし、一番眼目は、矢張りいい書類とか、図書とか、そういうものを保存して、それで目録をつくっておけば、本当に利用される方は利用されると思うのです。とにかくいいものを保存したいという、それが第一目的だろうと思います。しかしPRもおろそかに出来ませんので、外部からみて、こういうことをやったらいいだろうというようなご意見がありましたら、お話しいただ

きたいと思います。

西村さんにお話をまた続けていただきたいんですが、この委員会の人事は最初のころと現在と大分変わっているわけです。最初のころはどのような方針で委員が選ばれたのでしょうか。

西村 そんな厳密な選出の規定というのがあったわけでもないし、大体目分量で、こういう仕事に理解を持ってお手伝いいただけそうな方はどうだというわけで、しかしそれが余り地域的に偏在しては困るから、ある程度分散した形で適当な方をお願いするということがあったんですね。

津田 入江先生のころには顧問とか参与制をしかれておりますが、このころも地区別というようなことはまだそれほど考えておられなかったですか。

入江 のんきなもので、任期が切れてやめていくお方にしかるべき後任を推薦していただく。こちらでは分りませんからね。そのころは日本が20区近くなっておりましたので、どういう方がどうか全然分りませんから、やめていく方にご推薦を願うという形式をとりました。

津田 今も大体似たようなものなんですが、委員の定数が9名で、3年交代で勤めるということで、やめていかれる方が次を推薦する。ただ、推薦地域を今度決めようと、同県とか自分の地区だけじゃなくて、ある程度の地区のブロックを決めまして、その中から次を推薦しようということをして、この間の委員会で決めました。第1ゾーンと第3ゾーンを分けまして、第1

ゾーンが東京を1ブロックとして3ブロック、そして第3ゾーンが2ブロックの計5ブロック制にしました。

それで、ワンブロックから2人ずつ（東京ブロックは1人）委員が出ればちょうど9名になるということで分けたんですが、多少東京近辺に重点を置き過ぎたかもしれません。北海道・東北が1ブロックで、関東と新潟が1ブロックとなりますので、北海道・東北は非常に大きくなってしまっているんですが、交通に便利なところということで、集まりやすいところの方へ重点を置こうということによっておるわけです。こういう点も多少まだこれから修正していかなければならないかなと思っております。

西村 以前でも東京へ出やすい人というのが常に目どになってましたね。あるいはしょっちゅう東京へ来ている人。旅費を一々出すわけじゃないから。私なんかもしょっちゅう東京へ来ているものだから、それでやり玉に上がっちゃったらしい（笑い）。

安野 まぎれ込んだような問題が1つあるんですけどね。それは当時、クラシフィケーションの職業分類表なるものをR. I. が提案してやめちゃったんですね。それで柏原君にどこかの会合でお目にかかったときに、あんなもの、黙ってほうっておくと、日本のロータリー、くしゃくしゃになっちゃうぞと。何とか救うこと出来ないかというんで、救うとなったら、矢張りこっちでもって何らかの形でクラシフィケーション・ブックをつくるよりしよ

うがないんじゃないかということをお願いして、それが悪かったんですね。そのために、それじゃ君がやりたまえというんで、銀座クラブじゃなかったかと思うんですけど、私、いきなりご下命を受けまして、どういう組織でどういようにやったらいいのかといたら、気のきいた人を5～6人集めてやりたまえと。それでしょうがなくて、佐藤千壽君や何か、うるさ方を5～6人集めまして、クラシフィケーションの赤本をつくったんです。

津田 あれは全国の組織でつくりましたね。

安野 そうなんです。

津田 その後、地区ごとにつくるところが出てきましたね。

安野 ええ。あとは地区ごとにしていただきました。そうじゃないと、とてもじゃないけれども、責任を持ったことがやれませんのでね。あれがよかったか悪かったか、いまだに分りませんが、とにかくこのままあいう、何階建てといったようなロータリーの存在になりますと、クラシフィケーションってみんなどうやってやっているのか。大体「リース」なる言葉を分ってもらうことをやらないと、全部駄目なんだね。リースなるものを説明している間にこっちが飽きちゃうんですよ（笑い）。

入江 でも、あの赤本が役に立った。大変よかったですよ。

安野 そうですか。ありがとうございます。本当にR. I. に見つかるかと怒られるぞといっ

ら……。

入江 神守君がちょっと食いついたようだけど。

安野 そう（笑い）。神守君、入江さん、私なんていうのは、しょっちゅう三角軌道を馳せ回っているいろいろなことをやっていたんですけど、怒られることが多かったんです。これからの問題としてクラシフィケーションというのはどう取り扱うつもりなのか分らないですね。

津田 資金の点も、先ほど、西村さんのお話で、初期のころのが分ったんですが、初期のころは連絡委員会から交付金という形で出ましたね。そのときのメドはどのくらいだったのでしょうか。

西村 最初はわずかなものでしたけど、だんだんふえてきて……。

津田 今は協力金という形になって、会員が半期50円、その後100円になって、現在、一会員当たり年間200円ということになっているんですが、会員数が年々ふえておりますので、そう無理の無い運営は出来るんですが、それが去年は狙われまして……（笑い）。

実は協力金が狙われた根拠というのは、現役のガバナーでなければ集金能力が無いのだから、ガバナー会がこれを集めているのだ。そうすると、それをもらっている文庫に対する管轄権はガバナー会が持っているんだというようなところらしかったんです。これが規約の問題にひっかかってくるのです。これについてはどうお考えになるのでしょうか。



入江 これはガバナーが集めるんでしょうけれども、文庫協力金という名義で集めるんですから、別にご心配は無いと思いますね。

津田 それからもう一歩元に戻りますと、大体ガバナー会というものはR. I. が認めているわけじゃないですから、それが権力があるというのは、管轄権があるというのはまるっきりおかしい。最初のロータリー資料室も非常にR. I. に遠慮しながらつくってますものね。そういう気持ちが今のガバナー会に少し無くなってきた。既成事実のように組織が長く続きますと、謙虚さが無くなっちゃって、おれたちが権力だということを言い出すんですね。

西村 日本のロータリーが大変立派に成長したからそうなったんでしょうけど（笑い）。しかし、今お話しのように、ガバナー会が独自の権限を持つということはありません。便宜上、そこで相談して統一した方針を決めているだけで、権力を持っているのは個々のガバナーですよ。そこを踏み違えて、ガバナー会議というものが独自の権限を持つということになると少しおかしいと思いますね。

入江 いつかも申し上げたように、ガバナー連絡会議というのはあくまで連絡会議でございまして、何ら行政権も立法権も持ってはいないというのが私の言い分なんですけれども……。

西村 権利は持たないです。「権」の字つけたらおかしいもので……（笑い）。

黒澤 我々のころまではそれを堅持していたつもりなんですけど、我々の次の年から少しお

かしくなりました。

葛生 近藤先生が議長だったガバナー連絡会議の時代に、日本全地区の組織表のようなものをつくられていたようですが、あれほどのような趣旨だったのでしょうか。

津田 近藤先生というのは理科系の先生ですから、理論的に考えることが好きなんです。表をつくりまして、系統図をつくっておやりになって、ガバナー連絡会があるときに、順々とそれが発展していく段階を披露されていました。しかし、我々の年代はそれに対して批判をどんどんしてましたし、近藤先生も無理押しする気持ちじゃないんです。こういう考え方があるよということを書いてただけでした。あの年代でまあ功績があったのは、それまでガバナー連絡会はいろんな寄附集めに利用されていたわけです。例えば松の緑を守る会というのがあると、ガバナー連絡会へそれを持ってきて、ガバナー連絡会でひとつ承してほしい、地区へ帰って集めてほしいというわけです。それは排除したんです。そういう功績はあの年度でやったけれども、権力構造をつくらうというのには批判があったし、全体で真剣に取り上げたわけではありません。次の年度がそれを非常に利用したわけですよ。

黒澤 私の知る範囲では、事の起りは、先ほどもお話がありましたように、ガバナー連絡会議が200円ずつとった協力金のほとんど大部分がR. I. の理事の方々の活動を助けるための資金に使われていた。80%ぐらいはそのため

に使われていた。たまたま私どもの前の年度でございまして、もう一つ前の年度に向笠さんが会長になられて、会長のときはまだよかったですけど、今度は直前会長になられて、いろいろご活動なさる、その援助と、それから我々のゾーンから2人の理事が出たというために大変出費がでて、ちょうど清家さんがガバナーの議長のとき、ほとんど破産状態ということになりました。このままではいけない、どうしたらいいだろうかということで、向笠さんの会長の年度は理事が2人出たという年度でもって非常に出費したけど、その次からはもう向笠さんの問題も解決したし、理事も1人になるから、その次の年度は大丈夫ですと。またその次の次ぐりの年度から危なくなりますということであったんですけど、ちょうど私どもの年度の次の渡邊君のときからは、どうしても足りないということになって、それならば資金を持っている文庫をだき抱えようというのが事の起こりだと思います。

葛生 ガバナー会も基金のようなものは持っているのでは……。

黒澤 文庫の方は、R. I. 会長が出たとか、理事が出たり、そういうような特別の出費、あるいは七十年史、八十年史をつくるときは別かもしれませんけれども、そういうことがない限りはほとんどコンスタントに、200円の協力金で、会員が6%ぐらいの増加がございまして、十分我々の方は資金的には安定しているんだろうと思っています。

ただ、今後、七十年史、八十年史をつくるというようなときのことは、今後どういうことになるのか、またお聞きしたいと思っているんです。そういうことがない限り、我々の協力金は200円でまず十分ペイ出来るんじゃないかと思うんですが、いかがでしょうか。

入江 十分だろうと思いますね。後から出ると思いますけれども、図書館としての運営よりも、もう運営は決まっておりますから、図書館としての効率をいかにして上げるかということが今後の問題だろうと思います。

黒澤 今のお話のときに一番問題になるのは、東京ということと地方という問題が出て、東京の方の利用度と地方の方の利用度が大変バランスがとれないと。また、ある話によれば、地方にも文庫に相応するようなものが、関西の方にも何がしかのコレクションがあるようございまして、東北の方にも北海道にもそういうコレクションがあるやに聞いております。こういうコレクションと我々とはどういう結びつきがあるのだろうか。それから現在では、規約では東京だけでございまして、これをどうして地方の方々にご利用いただけるかというのが一つの大きな問題だと思っています。

西村 青木さんなんかやられた神戸の文庫というのはどうなってますかね。

津田 やってます。今、末正さんという方が委員長でやっておられます。個人的にはいろいろ電話したり、連絡とっております。それから札幌の方もやっています。ただ、文庫の系列と

というような考えではちょっといけないんじゃないかと思います。文庫とは全く違った性格で、地区でやっておりますから。

西村 絹川さんとか直木さんとか、あちらの方の資料をいっぱい持っておられる方がかなりあるとは思いますが……。これを完全にやるとなれば、少なくとも今、東京でやっている程度の本が無ければ、中途半端なものしか無いんだから、これはなかなか難しいですよ。地方で完全にしてくれるといえば、同じものをつくらなきゃならんということになりますよ。

葛生 兵庫ロータリー文庫について、あの地区の方が、平島さんがおられる間はよいとしても、将来の維持は難しいのではないかといっておられました。

西村 私もみてないので、どの程度なのかなと思っているんですよ。

葛生 兵庫ロータリー文庫の目録もうちに来ておりますが、分類の点では一般的な図書館分類と変わらないように思われます。我田引水ながら、蔵書資料類の収納量とその精緻なロータリー式分類法の点では、うちにはとても及ばないと思います。

また札幌の「情報資料室」からは、室長の越山さんという方がたびたび来訪されましたが、その方から依頼をいただいて資料文献類のコピーサービスを頻繁に行っております。また、あちらの情勢については「情報資料室ニュース」を送ってもらい、これによって知ることしております。

入江 ここは中央図書館ですからね。ですから、地方図書館に貸し出してやることも可能だし、それだけの機能を発揮したらいい。

葛生 ええ。そのようなことでは随分といろいろなご注文をいただきます。

安野 ですから、必要なものを向こうが要求してきたら、それはコピーを出来るだけ使って……。

西村 そういう連絡の拠点として地方に何かがあるのはいいですね。地方でもやりやすいですね。

安野 ええ。

葛生 むしろ私どもとしても、そのような形は望ましいと思います。文庫が今の状態で幾ら頑張っても、矢張り限界があります。

入江 メンバーが東京まで聞けば大変で、地方の図書館に聞けば……。で、地方の図書館で答えられない場合は中央図書館に助力を求める。これは大変結構なことだと思いますよ。

私、イギリスへ行きましたときのことを申し上げますが、R. I. B. I. なんて威張っている癖に、地方図書館が無いんです。各地区の図書館も無いんです。ところが、あそこは個人主義でございましょう？ 各クラブが持っているんです。縦、横の連絡はございません。その点は日本の方がずっと立派だと思いますよ。

津田 先生に調べるようにいわれて、チューリヒの支局に聞いたんですが、返事が無い。というのは、こういう文献を集めている機関が何も無いらしいですね。

葛生 フィリピンのマニラにあるようなことはちょっと聞いたことがあります。

安野 オーストラリアは立派にやっています。これはイギリス直系でやっています。イギリスよりいいんじゃないかな。

津田 ただ、今、入江先生のおっしゃった、運営よりも効率を考えろという意味では、図書の貸し出しが文庫の場合出来ないんですね。

葛生 そういえば、お亡くなりになったロータリアンのご家族から電話があって、遺品の中から出てきたのですがということで、「ロータリー資料室」の判が押された文献が戻されてきたことがありました。文庫の文献資料は1点だけですから、これを貸し出してしまうと、その間、他の方に迷惑をおかけするということがありますし、また全国の方々を対象として、しかも膨大な資料の中にはペラものも多く、また重要なテーマのファイルなどもありますが、これらの破損や紛失などを考えますと、残念ながら貸し出しは考えられません。

入江 立派な書物の貸し出しはコピーをつくって貸し出すという方法があるんですよ。ところが、そうなると、海賊版だということで、訴えられると大変なんです。

葛生 版權の問題については、かねがね気にしておりました。

津田 これはどういようにやったらいいのでしょうか。普通、図書館ですと、何冊か同じ原著があって、1冊ぐらいい貸し出しに向けているのでしょうか。

入江 図書館にもよりますが、貴重な本は貸し出ししませんね。矢張りそういうことはある程度コピーで、必要な章をコピーで分けるという態度をとっています。全編をやりますと海賊版ということになって、これは大変なんですよ。

津田 ただ、点数がふえるというだけじゃなくて、いわゆる報告書のようなものは、後で地区の歴史をつくり直すようなときには参考になるんですけども、それよりもいい本を集めたわけなんです。そこで、笹部さんのは入江先生が遺言書を書かせて文庫にちょうだいしましたけど(笑い)。最初のころ、いろいろな方から集めた貴重な図書があって、いまだに署名入りであります。例えば露口四郎さんからの寄贈のものがあるんですが、最近はそのようなものは少ないでしょう？ 最近で一番新しいのは笹部さんの蔵書ぐらいです。

西村 古い人でなきゃ持ってないんですよ。

安野 笹部君みたいに本気になって集めているというのは割合少ないんじゃないですかね。

葛生 東京クラブとか……。

西村 東京クラブにどういふものがあるのか、私も細かく調べたわけじゃないから分かりませんが、何かあると思いますね。

入江 案外無いんですよ。昔はすべて英語で記録とっていたでしょう？ 50年ごろだったか、日本から旗をシカゴクラブに寄贈して、その旗に何を書いていたかというのは私は分からない。オブジェクトを書いたのか、テストを書い

たのか、それは分らないので、東京クラブの親方といますか、湯浅さんに聞いてみたら、湯浅さん、調べてくれたんだけど、記録が無いんですね。シカゴクラブに紹介してもその記録が無い。古いのはすべて隠滅しているようですね。

西村 戦前のは無くなっているかもしれませんな。

入江 ええ。それに古い、いい書物は持っている方はもういませんですね。むしろこれからは立派な書物がどんどん出ますから、それを残らず集めるといふ方が大切じゃないですか。

西村 新しいものは集まりますね。

入江 集まりますよ。

津田 「ファースト・ロータリアン」、訳はたくさん出ましたからあるんですが、原著がございませんで、これは佐藤千壽さんに連絡とってちょうだい出来ました。

入江 「R. I. B. I. の歴史」というのはありますか。

津田 「The Golden Wheel」はございます。

入江 イギリスのは2冊あるんです。古いのにレビイというイギリスの「ロータリー」の編集長が編纂したのがあるんです。これが今じゃ貴重本になっているようです。私のところにはございますけど、コピーをとっていただく？

津田 遺言書を……（笑い）。

入江 いやあ、まだ早い（笑い）。お貸ししますから、コピーはとってください。これはR. I. B. I. の記述だけじゃなく、その当時のエバンストン本部のことが残さず書いてあるん

ですよ。戦後、第一次欧州戦争が済んだとき、ロータリアンで戦災に遭って困った人に、イギリス、ドイツ、フランスで財団を融通しているんですよ。そういう記録もちゃんと出ているんです。これはちょっとおもしろいから、コピーはとっていただいた方がいいんじゃないかな。

津田 何ページぐらいですか。

入江 相当です。だってR. I. B. I. の歴史は古いですから（笑い）。忘れなかったらお送りいたします。盗んじゃいけませんよ（笑い）。遺言は書いておきますけどね。ご存じでしょうか？ レビイという男。

安野 いい男だけど、ちょっと荒っぽい（笑い）。

入江 でも、お話上手ですよ。

安野 そうですか。僕は会ったこと無いんだけど。

津田 そういう本をどんどん集めたいですね。

入江 でも、R. I. B. I. の歴史も新しいのが出てますから、その新しいのをまずお求めになることですね。

安野 そうですね。

入江 それから「友」にはこの間、4月号に公認雑誌がずらっと並んでた。フランスが無い。あれは公認として無いんですが、大変立派なものです。

安野 フランスのマガジンはいいですね。原稿の入れ方なんかもきれいだし……。

入江 しゃれているでしょう？ 韓国の年鑑も入ってますか。

葛生 いや、韓国の年鑑は入ってないです。

入江 それはとらなくちゃ。立派なものですよ。大変立派なものです。極彩色の写真、カラー写真がいっぱい入って、随分お金をかけてますね。

黒澤 今、ソウル大会を控えて一番ヒートしているときでしょうから。

入江 どういう機関でどういうふうにして出しているのか知りませんが、向こうには「友」という組織は無いんでしょう？

安野 ええ。あつてなきようなものなんじゃないかな。しかし、雑誌は出しております。今度、公認されておりますからね。

入江 お手本をお送りしましょう。お使いください。

津田 日本の「友」も韓国では非常に愛読されているようですね。

入江 「友」にイスラエルの年鑑来てますか。

安野 いや、僕がやめちゃったらだれも集めてないんじゃないかな。

入江 あれも立派なものですよ。

西村 世界中のそういうものを集めるようなシステムになってないでしょうからね。

黒澤 そうですね。まだ日本国内が主で。

入江 それは「友」の方で一応やって、お集まりになったら、どうぞ……（笑い）。

安野 えさを出して、そして向こうからもらうように……。

入江 それがいいです。それから、「友」の英語版だの、どんどん送って……。

安野 「友」は出来るけど、こっちから出すものは無いですね。

入江 それは出来ません。それで文庫じゃ持ち切れないんだから。

安野 ですから、「友」なんていうのはせいぜいお使いになった方がいいんですよ。分つてはいるんですけど、ちょっとデリケートなんで……。

西村 デリケートであっちゃいけないと思うんだけど、どういうものかデリケートですね。初めっからそうなんです。

入江 文句いったらもう書いてやらないぞといつてやりますよ（笑い）。

そういうことで、今後、中央図書館としての文化財収集と、文化財の広報と両方面をひとつやっていたら……。

安野 さらっとおやりになればいいんじゃないかなと思いますね。

西村 文庫の方は、私のころはそんなところまで気は回らなかったけど、今の方は、どうしてこいつを皆さんに利用してもらえるかと。利用が少ないということは大変気に病んでおられるようですが、私は逆なんです。今お話しのように、権威のあるものにするのは何より必要ですけど、私は日本のロータリアンというのは余り利用しないと思う。大体そんな勉強しませんよ。「友」でさえ、あれだけ立派なものをつくっても読んでくれないというのが一番悩みの種なんでしょう。「友」を読まない人が何でこの文庫を利用するかというんだ。

安野 あれは僕は錯覚だと思うな。立派な本というのはみんなが読むんだと思っちゃうんですね。これは錯覚ですよ。おもしろきゃ、シャビイの本だって買ってくれるはずなんですけれどもね。

入江 4月号では大いに大切にしろと書いておきましたよ。

安野 そうですか(笑い)。

西村 ですから、本当に、何か求めるときにピチッとそういうのに応じ得るといことが大事なんでね。また大事なものがそこにあるということが大事なんでね。それがみんなから活用されないということは余りにされる必要無いんじゃないかと思うね。ロータリークラブの情報というものは、企業間の情報とか国際間の情報とは違うんですよ。そんな目くじら立てて、毎月追っかけられるようなものじゃないんですからね。だから、そう活用されないということは余りにされないでいいんじゃないか。

ただ、どこまでも存在はPRしなきゃならんし、それだけの内容を整えていくということは大事なんです、いわば縁の下の力持ちみたいなもので、華やかな存在にはなり得ないものと私は思うんですよ。

入江 ただ、こういう書物がここにはっきりあるということは広報しなくちゃいけないと思いますね。

西村 それはしなくちゃいけない。ただ、利用ということになると、そんなに日常やたら利用される性質のものじゃないと思うんですよ。

入江 でも、何か書くときや演説するときなんか、求められる方があってございますよ。

西村 それは本当に利用してみると重宝なものなんですよ。

安野 インデックスは大変なんですけど、あのインデックスがあると無いとじゃ、使う方も随分違うと思いますね。

西村 文庫へ行って2~3時間あちこちひねくり出しますと、立派な材料が出来ちゃうんですよ。それは味しめてはいるんだけど、なかなか一般の方はそこまでやらないですもの。

葛生 あと、よくあるんですけど、電話一本でこちらに資料をほとんどつくらせる方がいらっしゃいます(笑い)。

西村 それは少し図々しいね(笑い)。地方の人は出てくるのも大変かもしれんけど……。

入江 しかし、文庫が頼りなんでしょうね。

西村 そこまでいけばそれでいいですよ。

聞いても何も分らんじゃないかでは困るんで、応じ得る体制さえあればもう立派なですよ。

葛生 利用の状況ですが、近くの方よりも北海道のような遠方の方が多いですよ。おもしろい現象です。

西村 今、ガバナーに新しくなられた方は必ずあそこへ行っているでしょうかね。

安野 うちもそういうのは絶対行かせてますけどね。

西村 それこそガバナー会議の申し合わせで、ガバナーになったときはみんな張り切っているんですから、そのときにあそこへ行ってみ

させるといこと。そうすりゃ頭に入りますからね。こういうものがあるということ。

葛生 文庫の隣にあるabc会館の会議室をガバナー会の集まりで時々使っているようですが、そんなときでもガバナーの方は余り来られないですね。また文庫の会議室も余り利用されていません。

西村 だから、あそこでちょっとした集まりは必ずやってもらうという仕組みが出来ないですかね。ガバナーになってもあそこをみたこと無いというんじゃ困るんですよ。

黒澤 今度、7月1日の集まりは目の前の東京プリンスですね。あのときに文庫は新ガバナーに資料を提供してたんじゃなかったかしら。

西村 目録なんかは出していたように思いますね。

黒澤 ええ。そういうときに少なくとも何か文庫についての資料を……。

西村 今、文庫の会議室はさほどじゃないんだよね。今のガバナーの数では駄目だな。

葛生 とても無理ですね。

西村 あそこは会議か何かやってもらえばいいんだな。

葛生 15~16人ぐらいでしょうか。

入江 そういうように分けて招待会をなさるとか、お披露目会とか……。

西村 ご意見を聞く会ということにすればね。

入江 そういうことですよ。そういうときには安野さんを連れてくるとか……(笑い)。

安野 うそとまことを織りまぜましてね(笑

い)。

津田 次に、ガバナー会との関連なんです、今度の規約改正でその辺をどういうふうにするか、昨年来、練りに練っておるんですけども、今まで、ガバナー会の方も規約がちょいちょい変わるんですね。それで文庫の方も7回変わっているんです。その中に、先ほど申し上げましたように、一時、付属機関であるという時期がありまして、今現在は付属機関という言葉は無いんですが、委員長の任命などでガバナー会とまた関連を生じてきたりしているんです。この辺をはっきりさせておこうということで、いろいろ案が出ております。

葛生 ガバナー会の規約も二転三転するので、私なども時々分らなくなってしまうのですが、現在の規約では(委員会)という条項で「ガバナー会は下記の委員会の委員長を委嘱する。」として、文庫や「友」その他を挙げております。

そこでうちでは一応これを受けるような形で、委員会の他のメンバーについては委員長が委員会の推薦により委嘱する、としてあります。

しかし、またガバナー会が変われば、こちらも考え直さなければならぬでしょう。

安野 今度変わるというと、7月1日から変わるということなんですか。

葛生 そうですね。ただ、現在の服部さんが議長になられた段階では、規定はつくられてはいないようですね。

西村 「友」はどうなのかな。

安野 「友」は委員長は2年～4年、それで申し送りです。

西村 交代になると中で決めているわけ？

安野 はい。

西村 別にガバナー会には関係無い？

安野 関係無いですね。

葛生 「友」さんの規定をみますとそうですね。

入江 それは当然だ。部内で推薦するのは。

葛生 今のガバナー会の規約では、それぞれの委員会の委員長を委嘱し、その委員会に運営の全てを委任する、となっております。

そこで当方ではこれに対応して、規定の改正は、委員会のメンバーは委員長も含めて全員内部推薦を経るなど、極力独自性のあるものとして考えております。

恐らく「友」さんの規定に似たようなものになるでしょう。

安野 そうでしょうね。しかし、そういう問題が1つでもあると、文庫としてはちょっと頭の痛い問題ですね。

葛生 そうですね。協力金は各地区から直接ちょうだいしてますし、ガバナー会自体には何の権限も無いとなれば、今までの考え方がおかしいということになってきまして……。

津田 「米山」は法人になってますし、「友」の場合は公式雑誌にかわるものということで徴収してますから問題無いんですけどね。文庫はちょっとその点微妙なんです。地域の公認雑誌になってから「友」の場合ははっきりした規約

が出来たんでしょうか。

安野 それまでもあったことはありました。

しかし、余り完璧なものではなかった。

津田 その点は西村さん、どうでしょうかね。

規約では幾ら独立機関ということを示してもガバナー会の方も根拠は弱いわけですけども……。

西村 弊害が起こらなければね。

津田 起きなきゃいいんです。本当に善意の関連機関であればいいんですがね。ところが、時々おかしな人が出てきて……（笑い）。

西村 そういうのが出てくると困る。

入江 利用度が少ないというのが渡邊さんたちのおっしゃる原因だったんです。利用度が少ないのに独立機関で独立のお金を持つのは怪しからんというお話だったようです。

西村 それははっきりいって曲論ですよ。

黒澤 それは先ほどお話ありましたように、10年先になって初めて、ちゃんと資料を持っていたかということが分るといような性格のものなんでしょうから、毎日毎日がね。

西村 この点は委員長さんからも出来るだけ了解得るように向こうを教育しなきゃ駄目ですね。

入江 名を与えてもいいけど、実をとる戦術をひとつやってください。

西村 そういうことですよ。だから、向こうの下にあるような形でも構わないと思うんですよ。実質さえしっかりしてればね。余り荒立てちゃって、余計なことを突っつき出して

も……。

安野 いっぱいいますからね。今はいろいろな問題がありますから、余り突っつき出さない方が……。

西村 ちょっと誤解されたような形で何か矛先が向いてきたら、大いにやり返す以外にしようがないでしょうね（笑い）。

津田 去年は吉井さんのようなああいいう強い方ででしたから切り抜けましたが、吉井さんは本当に随分ひどい攻撃を受けたんですよ。

入江 要するに、行政権も立法権も無いものですから、幾ら威張ってもね。名を与えてもいいですよ。実さえとれば。問題はそれと、「友」と仲良しになることです。

安野 それは矢っ張りやっておいた方がいいんじゃないかと思います。

（安野氏退席）

津田 この資料分類表は大体武者さんがおつくりになったんですか。

西村 基礎はそうです。ただ、どういう項目があるかということは向こうは分らないわけです。ですから、それは全部私がやったんです。

津田 慣れると非常によく分るらしいですね。これで引けるらしいですね。

西村 ええ。システムはそうなっているんです。

葛生 事務所の棚ですが、従来、非常によく整頓されてあったんですけど、お客さんが来て、もっとみやすいように間隔を広げ、分類表のとおりにより一目して分るように、努力してこれ

からやりたいと思っています。どこまで出来ませるか分かりませんが……。

西村 あそこは部屋のスペースはどのぐらいですか。

葛生 30坪ほどです。資料もどンドンふえておりますので、会議室を利用して資料スペースをもっと広げたいと思っております。

このようにスペースのことを考えますと、将来は、先ほどもお話が出ました地方のロータリー図書館とか資料室が出来て、地方に関する細目はそちらで扱ってもらい、当方は主として中央部門として連絡のような役割を受け持ったら……などとも考えます。

入江 しかし、何でもあるというのが中央図書館の第1の義務ですよ。それはつまらないものでも文庫に保存をなさるといのがいいんじゃないですか。例えばロンドンにムリッシュ・ムジウムというのがございましょう？

そこに文献資料室がありますけど、昔の昔のものまで捨ててませんよ。利用者も少なく、新聞紙でくるんで縛って棚にほうり込んであるんですけど、利用しようと思えば利用出来る。

黒澤 いざというときに無ければいけないですね。

入江 ええ。矢っ張り中央図書館は何でもあるというのが第1の義務でしょうから。そのためにはちょっとスペースがありませんね。

西村 そうですね。

葛生 それに、あの建物が余り頑丈ではないらしいので、このまま資料がふえ続けますと、

将来床の強度が心配になります。

西村 そんなのを予定して建てたところじゃないから。

黒澤 今、米山奨学会の方でも、奨学生の資料が随分たくさんあって、こういうものは必要なところだけマイクロフィルム化しまして全部保存して、保存スペースを非常に圧縮することが出来たんですけど、文庫というのはそんなにフィルム化しちゃうわけにもいきませんし、インデックスやなんかで調べるためにそういう装置はあっても、原本は矢張り確実に持ってないと……。

西村 単に記録ならそれでいいですけど、物が必要なんです。

黒澤 ええ。そういうことですから、矢張りスペースの問題は将来ともつきまってくる問題かと思います。

入江 会議室をつぶせばいいようなもの、そうすると床が抜けるというんでしょう？（笑）

葛生 あと何年もちますか（笑）。

入江 そのうちまた転居があるかもしれませんね。

黒澤 そういった転居などのことを考えますと、財政的なことにはなりますが、現在、基金合計は借室の保証金・敷金などを含めると、3,500万近くありますが、こうしたものは手つかずでとっておきたいですね。万一の備えとして。

黒澤 ある程度の準備はしておく必要がある

かもしれませんね。

入江 「米山」は3年先までの予算を立てているんでしょう？

黒澤 3年先よりもっとですよ。私がいたころ3年先で、今はもっとずっと溜めておられますけどね。財団もこのごろ、ポリオプラスだ何かだかんだって、いろんなことに絡めるものだから、幾らか……。今はとても3年分なんていうことでなくて、もっとずっと資金を溜めておられます。

葛生 文庫の場合、現在年間予算は約2,000万円です。そのうちおおよそ3分の1が場所に関する費用、つまり大家さんに払う分です。そして人件費が約3分の1。その他の3分の1が委員会とか事務所の費用にあてられます。そして今後の財政の運用面での課題は、事務所と職員の問題だと思います。今後、資料の増加に対応して、現在の限られた事務所の空間を整備活用していくのにどのくらいお金がかかるかという問題と、それから職員の配備の問題です。

現在、事務局は私と女子職員の2人だけですが、これは人員配備の点ではぎりぎりの線です。万一突発的なことで一人が欠けた場合、身動きがとれなくなります。こうしたことで前の主事の足立さんも大変苦労されたそうで、私が引き継ぎを受けたときに、あと一人は絶対にふやしておくようにといわれました。その後いろいろといきさつなどもあって、2名のままで3年たってしまいました。

このところおかげさまで、会員増による協力

金収入も年ごとにふえてはおりますが、一方、部屋代や給料の値上げなどがあることも忘れてはならないと思います。こうした状況の中で、改装や増員など、事務局としては業務遂行の上での基本的な問題に迫られているわけですが、文庫の資金状況が潤沢であるかどうかなどについては、事務局を整備した後でなければ、論じられないと思います。また、長期の見通しによる前向きな施策なども、そのような安定した足場づくりがあってのことだと思います。

事務局として現在私が考えているのは、このようなことです。

黒澤 実際、3人でも大変難しいと思うんですよね。毎年毎年高齢化していく、人件費はふえていく、いざといったときに今度は交代者がいるかないかという問題、そういう面でもって、2～3人という企業は大変不安があるわけですね。

葛生 人件費については、資金の状況いかにによって、適宜コントロールしていかなければならないと思っています。

津田 定年は？

葛生 定年はありません。

黒澤 「米山」にもごいません。東京に綱島女史がおりますように、すべて定年がごいません。定年がなくて、すべて、世間が何%上がれば同様に何%上がるといいますから、大変な金額になってきちゃうんですね。世間ですと、定年近くになりますと、賃金上昇カーブを抑えてしまいますけど、私が「米山」の常務を

やっていたときもその点で大変問題を感じましたですね。こちらの場合でもそういう制度がございませぬから、世間一般が何%上がるといえば何%上がるということではずうっとストレートに上がっていきますからね。

入江 その問題はどうなりましたかね。私が文献代行のときには9人ばかりの事務職員がいるわけでごいません。そのお金の勘定のことで湯浅氏と相談したことがあるんですけど、「友」といい、それからガバナー事務所といい、文献といい、文庫といい、同じ事務職員で格差があっちゃいけないだろう、それをいかに統一的な基準を定めたいかという相談をいたしましたけれども、その後どうなりましたかな。

葛生 統一基準もありがたいとは思いますが、こちらは財政状態が豊かではありませんし、また条件もいろいろと違いますので……。

黒澤 条件が違いますし、ちょっと難しい点がありますね。それから、今は全く分かりませんが、5～6年前、私が常務理事をやっていたころは、「友」が一番たくさん部隊を持っておりますので、「友」を基準にして、大体右へならえというような形をとっているんですけど、「友」でも平均何%アップにしようという数字が出てきます。それを「米山」なら「米山」に当てはめていくと、先ほどいったように、ストレートに上がってってしまうという点で、東京クラブの綱島君が会員の大会社の社長さんより余計とっているという事態までいっちゃうんですね。綱島さんぐらい年数がふえていて、毎年平均ス

トレートというところ……。

葛生 東京クラブさんあたり結構な財政状況にもよるのですが……、私などいただく立場でもあり、また資金状況を考えなければならぬ二重の立場にありますが、機械的なパーセントアップなど、理解に苦しみますね。

黒澤 「米山」やなんかは資金がたくさんありますからね。ここは限られた、200円の会費ですからね。

葛生 そうむちゃなことは出来ませんよ（笑い）。

入江 会員は毎年ふえていますか。

葛生 ええ。ふえていますですね。

黒澤 6%ぐらいふえております。今そんなにインフレは激しくありませんから、今の程度としたらどうにか大丈夫です。

入江 ただ、もう一人職員をふやすというところ……。

葛生 ええ。そういうことになってくるとちょっと考えなくちゃ……。

黒澤 将来、もう少しスペースをふやそうというときの資金というものは今から考えてなければならぬ。

葛生 ただ、貴重なお金を払って採用するからには、それなりの人を採用したいですね。私のような者がいうのはおかしいですが。

西村 相当払わなきゃならぬでしょうね。

黒澤 今いる女の子は私のいる南クラブにいた女子職員で、多少ロータリーの知識がありますので、それを文庫の方に……。ですから、全

く素人じゃないです。

葛生 今や文庫にとっては貴重な存在です。南クラブに5年いて、文庫に来てから6年のキャリアがあります。津田委員長は文庫の資料探しをされてお分りと思いますが、彼女は資料事務の熟練者です。どこに何があるか、よく弁えており、また資料の内容についても目を通して、日常手際よく処理しております。

津田 さっき入江先生がおっしゃったように、職員を入れるんなら、海外の文献もどんどん収集出来るような能力を持った人がいいですね。図書館である程度教育を受けた人でないと駄目かしら。

葛生 ただ、文庫の場合は、一般の図書館とはかなり性格が違っていると思います。図書館司書としての知識を持っていることは結構なのですが、そのような資格と自信を持った人が、一般の図書館閲覧者に比べてかなり趣を異にしたロータリアンのお客様に対して、資料のサービスをするという仕事が果たして向くかどうか、一概に断定出来ないとしても、非常に不安に思います。

そのようなことから、これは理想論かもしれませんが、むしろ白紙の新卒者を、適性をみたくて採用し、ここで育てていければとも考えます。

今さら図書館司書の手を借りなくとも、資料に関する技術的な方法も、既に完成されていると思ってよいでしょう。その出来上がっている型の中に必要とするものは、適性はもちろんで

すが、ロータリーに関する知識だと思います。そのような意味で、ロータリーの関係者などは資料分類の仕組みさえのみ込めれば、すぐにも役に立つと思います。しかし、そのような人は年齢的にもお給料の点で難しくなってくるのではないのでしょうか。頭が痛いですが。

入江 人員増加の場合は委員長で決めるんですか。

津田 はい。委員長が人事権を持っているようです。

入江 じゃ、財源さえ確保出来れば可能なんですね。

津田 はい。

葛生 学歴、能力、語学力などはもちろんですが、その上に、うちのお客様相手なので、お茶くみなども上手にやってくれるような女性が欲しいですね。一種のサービス業ですから。そうすると非常に難しくなります。

津田 今度、「文庫概要」というものをつくらうと思ひまして、初めちょっと私が考えていたのは、各クラブへ、ロータリー文庫の内容とか運営を知ってもらうためにつくらうと思ひていたんですが、最近になりまして、「文庫概要」というのは委員会資料としてつくったらどうだろうか。それから「文庫案内」というような形で、これはもう少し砕いて、一般のロータリアンでもすぐ文庫の様子とか利用の仕方とかが分かるような、あるいは歴史が分かるような、そういう2種類つくったらどうかという考えになってきているんです。それで、この「文庫概要」の

方は、葛生さんにポツポツつくってもらって、この間お渡しした程度のところまで来ているわけですね。これはちょっと骨組み的なつくり方になっておりますので、もう少し読みやすいかっこうに直さなきゃならぬだろうと思ひております。「文庫概要」を初め考えたときに、主事をやっていた武者さんと足立さん、こういう方のご協力もいただいたらどうかと思ひまして、一席設けましてちょっと懇談してみたんですが、その後お2人とも、お年であるとかいうことで遠慮されてしまったんです。

葛生 「文庫概要」について、私が初めに考えたのは、いわゆる会社概要的なもので、内外を問わず、文庫のことを知らない皆さんに文庫のレイアウトを知ってもらうためのものでした。ところがその資料を集めているうちに、だんだん欲が出てきまして、総覧的なものにまで思いを馳せてしまいます。

西村 この「文庫概要」というのは一般に対してアピールするには具合悪くないですか。

葛生 私もそう思います。

西村 どういうものがあるかということだけが重要なんでね。組織や運営は余り関係無い。分類して、総括だとかなんとかかんとかいつても何のことか分からない。そうじゃなくて、もっと具体的にね。

葛生 使い道によっていろいろとつくり分ける必要があると思ひます。「文庫の手引き」とか「文庫案内」とか委員会向けの「文庫総覧」

のようなものとか。

西村 ただ、それは余り専門的なことは要ら  
んのですよ。必要なときには、来るなり電話を  
かけてくるなり、それでいいんだからね。そう  
すりゃこうしますということだけでね。ガバ  
ナーなんかに対しては歴代の「ガバナー月信」  
やなんかはずっとあるでしょう。あれなんか非  
常におもしろいんだなあ。だから、ガバナーに  
対してはそういうものが興味があるだろうし、  
一般の人には、ロータリーの、それこそ文献は  
どんなものがあるのかということ具体的なもの  
で示すことが必要だろうと思いますね。

黒澤 「ガバナー月信」に掲載をお願いして  
いる「文庫通信」の話をちょっと……。

葛生 ガバナー会議長の服部さんをお願いし  
て全地区の「ガバナー月信」に「文庫通信」の  
掲載をお願いしているのですが、その服部さん  
の 258地区は一番早く掲載してくれましたが、  
その後は全然出ておりません。同じく東京の市  
村さんの 275地区はぼつぼつといった感じです。

黒澤 むしろ月信担当の地区幹事の方が早い  
かもしれませんね。

葛生 こちらが願う文面には、月信の  
ご都合でもっていかようにでもアレンジされる  
なり、出されるなり、出されなくても結構だと  
いうようなことは一応書いてはあるんですけど。

西村 余りスペースが要らないように工夫し  
ないとね。半ページはちょっと大き過ぎる。

「ガバナー月信」はいろいろ載せなきゃならん  
ことがあるから、なるべく小さいスペースで要

領よく……。

葛生 ほとんど載せて無いのは、その 258地  
区と岐阜・三重の 263地区です。その他にこれ  
は変わったケースなのですが、北海道の 251地  
区では情報資料室というのをつくって「情報資  
料室ニュース」というのを発行しております。  
そして「文庫通信」はそこに掲載してくれてい  
るのです。内容的にあちらの資料紹介とダブる  
ような場合もあるでしょうに、よくもまあ載せ  
てくれているなあと感心するくらいです。

西村 そういうところはどんな材料を集めて  
いるんですかね。

葛生 文庫と似たようなものです。ただ規模  
はずっと小さくて、場所は札幌を中心とした10  
クラブほどの合同事務所の一部を利用している  
そうです。そして管理はその事務所の女性のう  
ち、古手の2名が受け持っているということです。

西村 そのくらいのことで何を集めているん  
だろう？

葛生 どんなものでしょうか。地区資金から  
もらう年間予算がたしか 100万円だそうです。  
神戸の平島さんのところも地区資金ですね。創  
立者の方たちは非常に熱心にやっていたら  
し、周囲からの話をいろいろ聞いてみますと、  
将来が心配ですね。

西村 中途半端なものなら、個人の有志が  
やってりゃ済むことです。

葛生 これは米山記念館のことですが、米山  
記念館に行ってみなければ駄目じゃないかとい

われ、昨年秋、文庫の初代主事の武者さんに  
案内していただいて見学してまいりました。

ここには、文庫の重複資料もたくさん引き取  
られているので、それらがどのように受け入れ  
られているのか、活かされているのか、記念館  
の性格を知る上でも興味がありました。ところが、  
あそこには専属の事務員もいないようです  
し、重複資料も引き取られてから2年は経過し  
ているのに、余り広くない倉庫のど真ん中に梱  
包のまま山積みされていました。ショックでし  
た。何とも申しわけないような……(笑)。

西村 配本の整理というのは大変ですよ。

葛生 野田さんという委員長他に、理事長  
の松井さんというお年寄りの非常に熱心な方が  
わざわざおみえになられて恐縮しました。

日常の管理は、近くの縁故の方の会社の女子  
事務員がお茶くみなどに来てくれているよう  
ですが、心細いですね。資金はあるでしょうに、  
あちこち痛みも激しいでしょうね。

西村 あげたのは重複する要らないものをあ  
げたので、本物はこっちにあるから構わない、  
どうでもいいようなものだけ……。あそこな  
んかそんなにロータリー文庫式のもの狙う必  
要無いんだ。直接米山さんに関係のあるもの  
だけにしておけばいいんですよ。それで値打ち  
があるんだもの。

葛生 財団法人ということですが、大きな抱  
負を持っておられるようですね。

西村 それ少し大き過ぎるんだ(笑い)。

入江 大河原さん、俳句をやっているんです

が、朝日新聞で当選しましたよ。

西村 あそこは鱧正太郎さんが大分面倒をみ  
ておられたんじゃないですか。

入江 ええ。それでかえって東京の反感を買  
いましてね。あんなところにお金やらないなん  
て、大変なことでしたね。

黒澤 佐久間さんあたり、骨を折ってくれて  
ね。

葛生 面倒みてくださると助かるんだけどと  
いうことをいわれてました。

入江 土地はどうになりました？

津田 隣接のところを買収しましたね。公園  
のようになっています。

入江 よく資金が集まりましたね。

津田 きょうは長時間いろいろお話いただき  
ましてありがとうございます。



座談会    ロータリー文庫について

1987年9月    ロータリー文庫  
(共立速記印刷株式会社 製)